

東日本大震災における 仙台市の商店・事業所の 支援活動事例集

心と心を紡いで、絆が生まれた。
地域と地域を紡いで、連携が広がった。

ひととまちと夢を紡いだ
希望のちからに、ありがとう。

仙台の商店街や個人商店、事業所が
知恵をしばり、力を尽くした
支援のさまざまなかたち、活動の数々。

心を紡いで、地域を紡いで、
見えてきた希望のちから、明日へのひかり。
せんだいのひと・まち・夢は、今日も元気です。

甚大な被害をもたらした東日本大震災より3年。
大震災は、私たちに深い悲しみをもたらした一方で、
実に多くの貴重な教訓も残してくれました。

仙台市では東日本大震災の際に、
商店街や個人商店、事業所等の皆さまによって行われた
支援活動について記録した事例集を制作・発刊し、
この事例集を通じて、震災時の商店の皆さまの
社会貢献活動を広くご紹介し、知っていただくとともに、
今後の復興支援活動などさまざまな活動の
一助としていただければと考えています。

表紙の写真

東日本大震災から1年経った仙台市青葉区中央2丁目のクロスロード商店街の様子。市立小・中学校の子どもたちが作成した応援旗が掲示されている
/2012年3月撮影(写真提供:仙台市)

※当事例集は、国の「平成25年度緊急雇用創出事業臨時特別交付金」を活用して、「復興支援活動情報発信事業」として実施し、制作しました。

東日本大震災における 仙台市の商店・事業所の 支援活動事例集

- 03 | あの日・あの時・そして今
思いを紡いで支援を語る座談会
- 07 | 復興支援活動の事例
商店街・個人商店・事業所の取り組み
- 50 | 資料
アンケート調査結果

- (株)赤井沢.....08
- アフリーク・ソレイユ.....09
- 石澤塗工店.....10
- (株)今庄青果.....11
- SMBC コンシューマーファイナンス(株)
プロミス仙台お客様サービスプラザ.....12
- (株)エンタツ.....13
- 柿沼米穀店.....14
- (株)鐘崎.....15
- 菅公学生服(株) 仙台営業所.....16
- (株)菊地恵一商店.....17
- KISEIグループ.....18
- CROSS美容室.....19
- 一般社団法人 国分町街づくりプロジェクト.....20
- さくら寿司.....21
- (株)シーズ.....22
- ジェイアール東日本レンタリース(株) 仙台営業所.....23
- (株)水晶堂眼鏡店.....24
- せんだい泉エフエム放送(株).....25
- 仙台観光(株).....26
- 仙台美術研究所.....27
- 地域生活オウエン団せんだい.....28
- 中條幸一 デンタルオフィス.....29
- 東北イラストレーターズクラブ.....30
- 東北カラーデュープ(株).....31
- 日振工発(株) 東北支店.....32
- (株)早坂サイクル商会.....33
- (有)ひらが.....34
- マルシェ・ジャポン センダイ.....35
- 我流久留米らーめん 麺屋 よか〇(よかまる)宮町店.....36
- (株)杜リゾート.....37
- レストラン 開拓家.....38
- (株)阿部蒲鉾店.....39
- うなぎ竹亭.....39
- 菊寿し.....40
- 手作りクッキーの店 (有)けんと 一番町店.....40
- 弘進ゴム(株).....41
- 三栄会.....41
- 菅原動物病院.....42
- 仙台弁護士会有志の会.....42
- 高忠整体施術院.....43
- (株)橋 寿司.....43
- (株)日専連ライフサービス.....44
- (株)ハナサク.....44
- (株)ハミングバード・インターナショナル.....45
- 晩翠亭いこい荘 旅館.....45
- ビューティー・イン・ファイブ.....46
- (株)日吉.....46
- ホテルふじや.....47
- (株)南仙台復興ビル.....47
- 宮城県宗教法人連絡協議会.....48
- JA全農みやぎ みやぎフードキッチンCOCORON.....48
- 女性専用お顔そり専門店
Love-Face(ラブフェイス).....49
- (株)和田商 レナーク・イスト.....49

(敬称略・五十音順)

あの日
あの時
そして今

思いを紡いで支援を語る座談会



株式会社 今庄青果
代表取締役専務
庄子 泰浩さん

有限会社 ひらが
代表取締役、ライフ・ビジネスプロデューサー
平賀 ノブさん

我流久留米らーめん 麵屋 よか〇宮町店
店主
樋口 雅雄さん

思いやること、助け合うこと。 いつも通りのことを、やり続けること。

決して特別なことではなかった、私たちの支援活動。

— まずは、みなさんの支援活動について自己紹介を兼ねてお話しください。

庄子さん 私たちの店は仙台朝市にある青果店で、震災の前年に創業20周年を迎えました。成人になったから社会貢献のできる、大人の仕事がやれたいねと思っていた矢先の被災でした。朝市は戦後の混乱期に誕生したので、何もないことが当たり前で、いつも非常時というところからの始まりでした。震災後にすぐ動けたのも、もともと何もないからです。朝市の基本は、モノをはさんでお客さまといつも相対していることです。この販売方法はとても無駄が多く、コストもかかると言われてきましたが、私たちは昔からの売り方を通してきました。人のつながりを大切にきた商売をしてきたおかげで、震災翌日に「店が開いていて本当に助かった」という言葉をいただき、決して大げさではなく、命をつなぐというやっとな一人前の仕事ができたと

思いました。

平賀さん 私は震災発生時、店に居なかったのですが、その時の社員の対応に感動しました。止まらなかった水道と電気のできるかと考え、まずペットボトルをお持ちの方に水道水を入れて差し上げました。地域によっては水が出ない時期もありましたので、大変喜ばれました。そして美容室ではプロパンガスを手配し、お湯でシャンプーをさせていただきました。化粧品やたばこも扱う、街の中心部にある小さな店なので、いろいろなお客さまが来られます。震災後は特に道を聞かれることが多くなりましたが、営業できなくなった店もありましたので、直接そこに電話して確かめるところまでして差し上げました。「笑顔とありがとう」が商売にとって何よりの財産だと思ってお客さまに接してきましたが、今回の震災を通して、相手を思う気持ちがどれだけ大切かが身にしました。そこからつながりが生まれ、ご縁

も生まれます。私はこれを「縁ターネット」と呼んで、支援もお店も長く続けられる秘訣がここにあると思っていっている活動に取り組んでいます。

樋口さん 私のラーメン店は、震災の年の1月1日に開店したばかりで、これから地に足つけて営業していこうと頑張っていた時期でした。震災による実質的な被害は少なく、プロパンガスと水道が使えたので、翌12日には「14時より営業いたします」と貼り紙を出しました。営業してみると、周辺にはコンビニエンスストアを含め、開いている店舗は見あたらず、すぐに行列ができました。ただ、妻の実家が南三陸町、母の実家は気仙沼市で、何も連絡がつかない時期だったので、大いに悩みましたが、やるしかないかと決断しました。小さい頃に遊んだ三陸の海を思い出して、たまたま「南三陸にラーメン届けます」と書いた募金箱を設けていただき、食材を探し回っては無我夢中でラーメンを作り続けました。お客さまも、ワンコインでラーメンとおにぎりを食べた後、財布の小銭を全部募金してくれたり、隣の友人から借金してまでお金を入れてくれた方もいました。とにかく大変協力的に募金していただき、早いペースで炊き出し資金が貯まり感謝しています。

— さまざまな支援を行う中で、「やってよかった」と感じたのはどんな時でしたか。

庄子さん 震災直後に野菜を寄付したり、業者さんに頼まれてお届けしたりする中で、七ヶ浜町にある七ヶ浜国際村に野菜を持って行った

時のことです。仕事を終えた帰り道で、運転していたトラックを自転車で追いかけて来て、荷台を叩く女性がいたのです。車を止めると「八百屋さんなら野菜を届けるだけでなく、売ってくれないか。この辺では買うところがなくて仙台に買いに行くところなの」と、困った様子でした。すぐに実現はできませんでしたが、その後何とか応えたいと行き来するうちに、七ヶ浜復興市が開催されることになりました。役場の方からぜひ参加してほしいとお声がけいただき、新鮮な仙台野菜を持っていくことができ、皆さんに大変喜んでいただきました。

樋口さん 地域との連携がうまくいったところは、結果的にスムーズに炊き出しができ、本当にやってよかったな、来てよかったなと思いま

目の前で起きた出来事に、自分たちができることをやろう。 自然と、助け合う輪が広がった。

したね。なかには、現地でボランティアを受け入れる体制はあったのですが、統制が取れず、支援を受け入れることができなかった地域もあり、支援場所が決まらず、何度も変更になった時は、「やっぱり慣れないことはやるもんじゃないな」とも思いました。しかし、喜んでくれた子どもたち、協力してくれた業者さん、募金してくれたお客さまのことを思い返すと、「またここに来よう」と心に決めていました。

平賀さん 「縁」や「つながり」というのは、言葉から生まれるものだと思います。「ありがとう」や「おはよう」とかの当たり前の挨拶を交わすところから、すでにご縁が始まっているんです。それは、心から本当にそう思ったときに自然に出てくる言葉です。私は、この言葉の力の大きさを強く感じており、何度も助けられ、勇気づけられました。

庄子さん その通りですね。「おはよう」や「いってらっしゃい」という言葉には、「何かあったら助けるからね」という意味が後ろに隠れているんです。

— 支援活動にあたり、団体や組織と連携できたこと、できなかったことなどはありますか。

樋口さん 店で営業しながら募金を呼びかけていた時、お客さまとして来店したボランティア団体「TSUNAGARI」の勝俣さんに出会いました。「炊き出しやるなら手伝いますよ！」と声をかけられ、私も炊き出しは未経験で何をどうしていいのかわからなかったの、いろ

いろと教えてもらい、現地との橋渡しをしていただくことになったんです。この出会いがなければ、炊き出しも実現しなかったかもしれません。

4月下旬になり、南三陸町のボランティアセンターに申し込みに行って準備を整え、徹夜で仕込んだスープを積み込んで出発しました。ところが、着いた場所には別のボランティアが活動しており、困り果てたところに「TSUNAGARI」の勝俣さんから連絡があり、他の場所を紹介していただくなど、炊き出しの場所が結局、二転三転してようやく始めることができました。

庄子さん 5月の連休が近づき、全国から大勢のボランティアが集まった被災地の災害ボランティアセンターは、大変な混雑でしたね。



株式会社今庄青果
代表取締役専務
庄子 泰浩さん

震災当日、六郷の自宅に帰る途中に、津波の余波が押し寄せる中に自転車で入って行った女子中学生2人を止められなかったことが、いまでも悔やまれますと語る。
(P11で活動事例を紹介)

樋口さん 情報を整理して、ボランティア活動を振り分ける仕事もボランティアさんが中心となってやっているので、腹も立てられず、やるせない気持ちでいっぱいでした。

庄子さん 人は居るのですが、いつのまにか変わりますし、つながっていないんですね。大事なことが伝わっていないんです。やっぱりエリアの核となる人が必要なんです。それはお店にいる人でも同じです。

樋口さん たしかに地域のリーダーがしっかりしているところは、ラーメン炊き出しもやりやすかったというのが実感です。

平賀さん クリロード商店街では青年部が大変頑張っています。震災直後には、町内会として、店舗に明かりを絶やさずつけておこうということになりました。明かりは人をほっとさせる力があるので、各店舗では照明をつけ放題にしておいたのです。開けられる店は声をかけ合って極力営業してもらい、アーケードを歩く人たちに元気になってもらおうと思ったのです。3年後のいま、人通りは平日の日中でも、すれ違うのが大変なほど多くの方たちが歩いています。これはきっと、その時の恩返しで歩いてくださっているのだなと思っています。

— 普段からの人とのつながり、そして新たに出会ったご縁が、支援に大きな役割を果たしたのですね。

庄子さん 私たちのような個人商店は、大型店舗のようにすべてマニュアルで対応するのではなく、商売の最前線で売り買いしながら

アルタイムで対応を更新しています。そんな店が集まり、つながっているのが商店街なんです。仙台朝市には10店以上の魚屋さんがありますが、同じ魚はありません。浜ごとに仕入れられているので揚がった魚はそれぞれ異なり、いずれかが不漁のときは、別の浜の物が補います。そんな補完関係がすでにあり、人でつながっている店には、災害対応のヒントになることがたくさんあるんです。

平賀さん そうですね、小さな店1つでは何もできません。みんながつながって1つになり、同じサービスを提供するなどで商店街として大きな力になります。仙台市のように大型店と個人商店が競合しながら、同じ地域で共存共栄している例をあまり見かけません。私たちも大変誇りに思っており取り組んでいます。



有限会社ひらが
代表取締役
ライフ・ビジネスプロデューサー

平賀ノブさん

“ありがとう” “元気でね”。当たり前のように感謝の言葉が言えた。まごころや思いやりが行き交い、お互いの気持ちが通じ合えた忘れられないことばかりと振り返る。
(P34で活動事例を紹介)

普段からのつながりと、運命的な出会いがあって、実際に支援することが可能となった。

— 実際の活動を通じて思ったことや、他の商店・事業所の参考になるようなことはありましたか。

平賀さん 相手の気持ちを思いやるということだと思います。あの時は、日本国中みんな素晴らしい人でいっぱいでした。いざという時は、決まり事や常識にとらわれず、みんな人間として行動しました。そこが簡単なようで大事なところですよ。

クリロード商店街でも、普段ならアーケード内で勝手に物を売ってはいけませんが、非常時ということで、必要な物に困っている人が大勢いましたので、物を売ること認めてあげました。また、義援金を岩手県の被災地に車で届けに行った時、自衛隊の方々が悪命にがれきをかき分けて道路をつくっていた姿がとても印象に残りました。今回の震災を通じて感じたのは、男性の働きの力強さでした。男性をもっ

と思いやる気持ちを大切にしなければいけないと、つくづく思いました。私も支援物資として、つつい女性用品ばかりを車のトランクに詰め込んでしまい、男性の下着は持っていきませんでした。これには本当に後悔することしきりでした。

— これからやり続けたいこと、いままも継続して活動していることなどがあればお話しください。

樋口さん 炊き出しで知り合ったボランティア団体“TSUNAGARI”さんを通じて、南三陸町泊崎の宿にある“パティスリーくりこ”のロールケーキ『絆ロール』を販売しています。宿は一時、避難所にもなり、多くの人たちを救ったというロールケーキです。販路に困っているようでしたので、ふたつ返事で引き受け、現在も協力しています。ラーメン屋なのでそんなに数は出ませんが（笑）。

庄子さん でも、売るところがあるっていうのは、とてもありがたく、大事なことですね。せっかくできたつながりを、生かさなないのはもったいない。つくる人がいて品物も十分だけれど、多くの場合、売人や場所がないというのが実情なんです。販路を支援することは見過ごされがちですが、とても大切なことです。

樋口さん そのときの縁が切れていないことが重要ですね。この先、時間が経つにつれて、人の心につなごうとする気持ちが薄れていかなないようにしたいと思います。そのために、私は周辺に新しい店が開業すれば顔を出してみ、よろしくという挨拶は欠かさないように

しています。

平賀さん 私たちの商店街では、ようこそ！と花束をプレゼントしていますよ。事務局を通じてその辺はしっかりやった方がいいと思います。町内会にも入っていただきたいですね。誰もやる人がいなければ、人に頼らず、自分がつながりの部分や盛り上げの役回りをやるべきでしょう。自分たちの町を歩きながら少しずつ種をまき、人に役立つことをしようとすれば、やがて人の集まる町になってくるはずですよ。そして歩き回った分だけ世の中は開け、情報が集まり、縁が生まれ、花は開くことになります。

— 震災から3年が経ちました。これからの支援活動や、あらためて思うことなどをお聞かせください。

平賀さん 第1回東北六魂祭の開催時に、県内の運輸会社さんからレトルトカレー1500食分を役立ててくれと寄贈を受けました。そうこうするうち、今度はお米200kgが届けられました。ご縁でつながった炊飯専門業者さんを紹介していただき、JTさんはジュースを提供、テント業者さんはテント、ごみは清掃会社の方が仕分け用具と、それぞれの分野の方々のつながりと連携でご利用いただき、子ども支援のチャリティー活動は大成功を収めました。ガールスカウトが、これもボランティアで募金活動をしていただき、このチャリティー活動で集まったお金に、私も少し足して宮城県の子ども基金に寄付させていただきました。これも続けることが何より大切です。初年度が1歳だとする



と、成人する20歳まで私は頑張っているつもりです。

庄子さん 先ほど種をまこうという話がありましたが、八百屋の場合にはまさに、畑に種をまき、野菜をつくってくれる人がいないと商売が成り立ちません。特に私の店は、仙台の伝統野菜を中心に、実家のある六郷を中心に、七郷、荒井、荒浜周辺の野菜を販売するのが仕事です。しかし残念ながら、いまは津波による塩害で野菜をつくることができず。そういう状況の中で、いろいろなご縁でつながった大学生たちが、地道な手作業で畑を元に戻そうとしていたんです。土の下にはがれきが埋まっていて、機械では刃先が壊れるので、手で揉みほぐすしかありません。私は、そのサークル“ReRoots”のボランティア活動を、側面から支援し続けることにしました。活動に合わせて食材を用意し、炊き出しで体を温めて労をねぎらい、絆を深めていきました。こうして畑の土は少しずつ復活し、1年後には収穫できるようになりました。

支援活動を続ける。そのつながりが、新たな連携をつくり、まちづくりに生かされる。

たが、八百屋が売れるほどの数はありません。しかし、せつかくの成果を無駄にできないと思い、私は「できた野菜を売ってはじめて農家の支援になる」と話し、朝市の一角を彼らに提供しました。現在は、週に1日ですが“りるまーと”の名前で自分たちが販売し、農家に還元するまでになりました。

平賀さん それはとても素晴らしい取り組みですね。大学生のみなさんは純粋な気持ちでボランティア活動にあたり、庄子さんは食の現場を支える立場として関わるとい、みごとな連携だと思います。

庄子さん ありがとうございます。現在はそんな経験やつながりが食育に生かせたらいいなと思い、「食べ物と震災」というテーマで学校の子どもたちにお話させていただいています。

樋口さん 私も近くに仙台市立東六番丁小学校があり、社会科の体験学習の授業などに、これからも協力させていただきたいと思っています。地域とのつながりは、これまで以上に大切になってくると思うのです。今回の震災を通して、私たちが得られた体験は本当に貴重なものだと思います。しかし、3年しか経っていないのに、もう過去のことになり、あの大変さを忘れつつあるのが現実です。次の世代にもしっかり伝えていくために、どんなことでも発信し続けたいという思いです。店を運営していくことは一番大事なのですが、その基盤をつくるのが地域とのつながりや、地域のためにどう役立つことができるかという気持ちではないかと、皆さんのお話を伺って強く感じました。

庄子さん 私たちは、商売を通じていつも人と関わりたいと思

ます。特別なことではなく、普段の暮らしやつながりが、いざという時の動ける準備になることを肝に銘じておきたいですね。つながりを大切にしようと思わないと、消えていってしまう世の中なので、普通に生きながら、つながりを持ち続けられたらいいなと思っています。

平賀さん 私は小さなことでも、勇気をもって行っていただきたいと思っています。街にごみが落ちていても、それを拾う人の勇気は大変素晴らしいものです。人とのつながりや付き合いを大切にしながら、どんな小さなことでも続けていくことが、幸せの種をまいていくことになると信じて頑張っています。

— 本日はありがとうございました。



我流久留米らーめん
麵屋よか〇宮町店
店主

樋口 雅雄さん

マツダ製麺、八百惣商店、村上企業、エンドーミート、日東商会、鈴木米穀、各取引先の緊急時の対応には、いまい出すだけで頭が下がり、感謝しかないと言う。
(P36で活動事例を紹介)

